

# 最新事情

高校編④

丸山正二郎校長。就任3年目。  
教員として同校にいた時期もある



ビジネス街のど真ん中に位置する東京都立芝商業高等学校。生徒は社会の空気を日々感じながら登校する



いずれ経験する実際の社会を知り、  
目標達成に必要な力を身に付けてほしい

## 東京都立芝商業高等学校

(東京都港区)

東京都立芝商業高等学校は大正13年創立で男子商業高校としてスタート。昨年、創立90年を迎えた歴史ある商業高校だ。同校では、1年次からホームルーム合宿や全員参加のインターンシップ、ビジネスマナー指導を実施し、キャリア教育に力を入れている。資格取得にも積極的に、課題研究で秘書検定に挑戦する生徒も多い。同校の詳しい取り組みを伺った。

### 1年次に全生徒対象の インターンシップを実施

JR浜松町の駅を降りると大勢のサラリーマンと擦れ違う。東京都港区海岸。ここは貿易センタービル、汐留ビルが立ち並ぶビジネス街

だ。羽田空港に通じる東京モノレールや、ゆりかもめが近くを走っていることもあり、観光客の姿も目立つ。まさに社会の空気を間近で感じるができる場所。東京都立芝商業高等学校はそうした恵まれた環境にある。

同校の特徴は、就職と進学の割合がほぼ同じであること。商業高校と聞くと「卒業＝就職」と思いがちだが、同校は一

線を画する。丸山正二郎校長は商業高校が目指す教育について次のように話す。

「学校説明会で『就職に強い商業高校ですよ』ね」と言われることがあります。確かに卒業生の多くが社会で活躍している事実は、『就職に強い』ことを裏付けています。しかし、それは『高卒の就職』に強いという意味ではなく、大学・短大・専門学校を出た後の就職にも強いという意味なのです。社会に出たときに活躍できる生徒を育てる。これがわれわれのミッションです。そのために、実際の社会に出たときに役立つ学びを数多く展開しています。広い社会の中で、将来どのように活躍していくかを生徒に考えさせ、目標を持たせる。その目標達成に必要なスキルを習得できる商業教育を実践しなければなりません」。

生徒に社会でどのように活躍するかを考えさせ、目標を持たせるために実際の社会を知ることには重きを置く同校。特徴的なのは1年生全員が参加するインターンシップだ。

「将来出ていく社会のことを知らなければ、目標の持ちようがありません。1年次のインターンシップを通して、実際の社会を知るきっかけにしてほしい」と丸山校長は強く願う。

実施する時期は2学期後半。1年生約200名と、2年生で再度希望する約100名が同じ期間にインターンシップに参加するため、受け入れ先は約120社に上る。

社会で働くのはもちろん、社会人と接するこ



(左から)  
杉村一美先生、塚田行江先生、  
神菌智子先生。三人とも、課題  
研究「秘書実務」を担当する



1年生の1学期に実施される「ホームルーム合宿」。その中で礼法指導の時間が設けられ、お辞儀やあいさつを学ぶ生徒たち(右下)。終了後は、夕食作りで親睦を深める(右上)



インターンシップの様子。地元のスーパーで品出しに挑戦。1年次のホームルーム合宿「礼法指導」であいさつやお辞儀を学ぶため、受け入れ先企業から「芝商の生徒は礼儀正しいのはもちろん、あいさつが自然」と好評だという



とも少ない高校生でも受け入れ先に失礼のないよう、インターンシップの事前学習ではビジネスマナー指導が行われる。指導の詳しい内容について杉村一美先生はこう話す。

「事前学習では外部講師を招き、あいさつやお辞儀の仕方などの基本的なことから、電話の仕方や仕事を教わる方にとのよう尋ねるべきかなどについても実技を交えて学びます。私たち教員が指導すると、どうしても生徒は受動的になってしまいがちですが、外部講師の方が来ると生徒の背筋がピンと伸び、能動的になるのがよく分かります。指導は約1時間。その1時間だけでは教わったことを習得するのはなかなか難しいので、さらに時間を設け、確実に身に付くようおさらいしています」。

受け入れ先企業によって仕事内容は異なるが、ホテルではチェックインやチェックアウトの業務、スーパーマーケットでは品出しの業務を経験することができる。

「インターンシップの様子を見に行くと、皆目を輝かせながら生き生きとやっています。顔つきが違うのです。授業やアルバイトでは見せない表情をしていますね」と杉村先生はほほ笑み、生徒がインターンシップで得るものについてこう続ける。「仕事を体験するだけでなく、そこで働く方たちから、その仕事をなぜ選んだのか、仕事の仕方、そしてやりがいなどについても貴重な話を聞くことができます。そうした経験は、生徒の将来の方向性に影響を与えてい

るのではないかと思います」。

インターンシップ終了後は礼状を書き、お世話になった約20社を招待し報告会を開催。インターンシップを通して気付いたことや、得たことをパワーポイントでまとめ、発表する。

「お礼状にしても、パワーポイントにしても、書いたりまとめたりすること自体が勉強になる。実際に業務を経験するだけでなく、全ての作業が生徒の力になるのです」(杉村先生)。

### 伝統行事のHR合宿で 芝商の生徒になる!

インターンシップに限らず、卒業生の声を実際に聞ける就職懇談会や企業見学会、企業人講話を実施するなど、1年次から3年次まで卒業後の進路に向けた手厚いキャリア教育を展開している同校。こうした取り組みは、入学時からすでに始まっている。

1年次の「ホームルーム合宿(礼法指導)」では、入学早々の5月に一泊二日の進路指導が行われる。「この合宿が進路指導の第一歩」と話すのは神菌智子先生だ。

「学校生活をどう過ごすべきか、どういった意識が必要か、それを生徒に伝え、理解してもらうのが大きな目的です。先ほど丸山校長の話にあった『社会に出てどう活躍したいか、そのためにどういった勉強が必要か』といったことや、基本的なマナーやコミュニケーション力の大切さも伝え、芝商の生徒である」という自



覚を促します。礼法指導ではあいさつやお辞儀の仕方などを教えます。仕方だけではなく、あいさつをする意味、お辞儀を身に付ける意味、そこも指導の大きなポイントです」。

長年続くホームルーム合宿は芝商の伝統行事。「この合宿に参加しなければ芝商の生徒になれないと言われるほど、本校にとってなくてはならない行事です」と塚田行江先生は話す。

### ビジネスの基礎があるから 秘書検定は挑戦しやすい

1年次から、手厚いキャリア教育を展開する同校。資格取得も意欲的で、卒業までに「就職」「進学」に生かせる資格や検定に挑戦することで、合格だけでなく、こつこつ努力する力の習得も期待する。

挑戦する資格は簿記や会計、情報処理に関するものはもちろんのこと、3年生の「課題研究」では秘書検定に挑戦する生徒も多い。秘書検定の取得を目指す生徒を集めたクラスを「秘書実務」と名付け、合格に向けた指導を行う。

今年、課題研究で秘書検定を選択したのは62名。クラスは三つに分けられ、神菌先生、杉村先生、塚田先生が指導を担当している。指導で工夫している点を神菌先生はこう話す。

「6月の試験に向けて秘書検定3級の内容全てを網羅するのは厳しいのが現実です。そのため授業ではポイントを絞って、高校生が接する機会が少ない贈答のマナーや慶弔について解

説しています。授業で触れることができなかつた部分は自主的に勉強することになります。1年次の商業科目『ビジネス基礎』で経済活動やビジネス活動の基本について学んでいます。ビジネスに関する基礎は身に付けています。一から学ぶ内容ばかりではないので、秘書検定は本校の生徒にとってチャレンジしやすい検定だと思います」。

実際に合格者に話を聞くことができた。3年生の田部井智也さんは、就職懇談会で先輩に「勉強して損はない」と言われ、受験を決めた。

「実際に勉強してみると、母に教わった冠婚葬祭の知識なども含まれていて取り組みやすかったです。難しく感じたのは敬語の使い方でした。言葉遣いに慣れるためにも、過去問題を10回分解いて本番に臨みました。おかげで3級は無事合格。2級もこの調子で頑張ります！」。

同じく3年生の谷裕美さんも3級に合格。苦労した点についてこう振り返る。

「来客の席次が難しかったです。会議室にお通ししたとき、どの席を勧めるか、車や電車ではどの位置が正しいのか、これまで考えたことがありませんでした。解説を読んでも分からないときは先生に聞きに行き、疑問点は残さないようにしました。私も言葉遣いはとても勉強になったと思っています。卒業後は販売の仕事我希望しているので、生かすことができると思っています。楽しみです」と谷さんは笑顔を見せる。

田部井さんも卒業後は就職を希望しており、



(左から) 今年6月に秘書検定3級に合格した3年生の谷裕美さんと田部井智也さん。分からないところはお互いフォローし合ったそうだ

「接客業に就きたい」という夢を実現させるため、すでに夏から就職活動を始めている。

「高校生のうちに秘書検定を取得できれば、さまざまな方面においてとても有利になると思います。知名度がある検定を履歴書に書くことは、就職を希望する者にとって大きなプラスになるでしょう」(神菌先生)。

田部井さんと谷さんは、伝統行事であるホームルーム合宿をはじめインターンシップももちろん経験している。当時のことを尋ねると「よく覚えています。インターンシップでの経験があったから、販売職に就きたいと思ったのです」と谷さんは振り返る。

実際の社会に役立つ学びを経験した二人は、将来の目標を見つけ、その目標に向かい努力している。「幅広くビジネス社会を学び、将来を真剣に考えてほしい」との丸山校長の願いは確実に生徒たちに届いているようだ。